

## 韓国語研究の思路：その前奏曲として

辻野，裕紀  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://hdl.handle.net/2324/2545041>

---

出版情報：2019-12-16  
バージョン：  
権利関係：

## 韓国語研究の思路 ——その前奏曲として——

辻野 裕紀(大学院言語文化研究院 准教授)

### 1. はじめに

本講義の目的は、韓国語学＝朝鮮語学(Korean linguistics)の具体的な研覈の概観を通じて、韓国語研究のありようを触知し、韓国語や言語をめぐる思考の端緒を得るところにある。

### 2. 韓国語学習の妙味

韓国語研究の世界に分け入るためには、何よりも実用語学としての韓国語に肉薄していなければならないことは絮言するまでもない。韓国語の運用能力を欠いた言語学徒の韓国語研究は必然的に皮相的なものにならざるを得ないし、信頼に価しない場合が多いであろう。韓国語研究を志すのであれば、まずは韓国語学習に孜孜として励む必要がある。卓越した韓国語研究者であることは、尤なる韓国語の使い手であることを伴立する。

では、前提としての韓国語学習の固有の妙味は奈辺に在るのか——私なりの解は以下の如くである：

- (1)母語話者が身近に大勢いることの楽しさと有難さ
- (2)日本語と似て非なる言語であるという言語学的な面白さ
- (3)ハングルという文字の知的な面白さ
- (4)韓国語を学ぶことで深まる、隣国への関心と理解

### 3. 韓国語研究の妙味

韓国語学習と韓国語研究は、言うまでもなく、異なる営みである。しかし、相互浸透的でもある。例えば、上に挙げた、(2)は日韓対照言語学<sup>1</sup>の面白さそのものであるし、(3)は文字論(grammatology)<sup>2</sup>で討究される問題である。また、韓国語を研究することによって、韓国語をより深く知り、螺旋的に韓国語の力量を錬磨することにも繋がる。さらには、韓国語教育の臨床において、非母語話者の学習者から突き付けられる問いは、多くの場合、勝れて言語学的なものである<sup>3</sup>。こうした点において、韓国語学習＝韓国語教育と韓国語研究、別けても現代韓国

---

<sup>1</sup> 日韓対照言語学の入門書としては、油谷幸利(2005)がある。日韓両言語の〈表現様相〉の差異に着目し、豊富な実例を提示した金恩愛(2003)も重要。日韓対照研究の文献リストは、辻野裕紀(2012a)を参照のこと。

<sup>2</sup> 文字論については、河野六郎(1994)を熟読し、その奥深さに戦慄すべきである。ハングルについての信頼できる新書としては、野間秀樹(2010)を推挙する。

<sup>3</sup> 塚本勲(1997:133)は、韓国語を学ぶ若い学生や院生に向けて「イエスペルセンになれ」というメッセージを送っている。イエスペルセンは、最大の英語学者だが、英語母語話者ではない。しかし、日本語を

語研究は相即不離の関係にあると言ってよい。例えば、接続形語尾-고と-아서/어서の機能＝意味はいかに異なるのか<sup>4</sup>、一般に〈意志〉を表すと言われる諸形式-겠-, -(으)르래요, -(으)르거예요, -(으)르게요などはどのように使い分ければいいのか<sup>5</sup>、못 읽어요《読めません》の発音は[몬닐거요]と習うが、[모딜거요]という発音もよく耳にするのはなぜか<sup>6</sup>、학술지《學術誌》はなぜ[학술찌]と〈流音後濃音化〉を起こさず、[학술지]と発音されるのか<sup>7</sup>、물질적《物質的》はなぜ[물찐적]とならず、[물찐적]と発音されるのか<sup>8</sup>、《お天道様》は해님とも햇님とも書くが、どちらが正書法上正しいのか<sup>9</sup>…。現代韓国語研究は、日々の韓国語学習の中で逢着する素朴な問いを自ら解いていく営みである。是く考えると、韓国語学習と現代韓国語研究は地続きである。しかし、念のために付言するが、こうした問いの答えは、当然ながら母語話者も普通知らない。試みに、周囲の韓国からの留学生に如上の問題について質問してみるがよい。誰一人として過不足なく精確に答えられる者はいないであろう。母語話者であろうと、非母語話者であろうと、言語学者のみが迫ることのできる論件である。当該言語の運用能力を有していることと、その言語の構造や体系を把握していることとは、全く別次元の事柄なのである。

方言研究や語史研究には、また別の学術的でマニアックな醍醐味がある。一般にはあまり理解されていないが、方言学と歴史言語学には密接な関係がある。扱うテーマにもよるが、方言研究は基本的に語史研究に連なるものと言ってよい。方言学と歴史言語学は補完の関係に在るとも言える。韓国語の多様な姿態を顕現させ、韓国語学の堂奥に入る享樂——これもなかなか他の領域では賞翫することができないものである。語史研究は、現代語の不規則性を説明する鍵鑰にもなる。現代語のみを視瞻しては分かり得ないことが、語史的視座に照らすことで活現してくる事象も少なくない。この点において、現代語の研究者も、語史の知識は不可欠である<sup>10</sup>。また、語史研究には、書誌学的な教養も必要となる。

言語教育研究については、現状の言語教育への違和も論文執筆の動機となりうる。言語はコミュニケーションの道具だとよく言われるが、言語とは果たしてその程度のものなのか。言語能力とコミュニケーション能力は別物なのに、それらが混濁してはいないか。そもそもコミュニケーション能力訓育も言語教育の領分なのか。〈話すこと〉ばかりが重要視されているが、読む力

---

母語とする英語学者のように、母語と英語の距離が遠く離れているわけではなく、英語と系統的に近い言語であるデンマーク語を母語とする英語学者であった。塚本氏曰く「すぐそばの外からみると、よくみえる」。これは日本語と韓国語の関係においても同断であり、日韓両言語は、英語とデンマーク語のように系統関係が証明された言語ではないが、文法構造をはじめ、類似した点が非常に多い。日本語を母語とする韓国語学習者、韓国語研究者だからこそ、日本語をプリズムとして見えること、分かることが数多あると私も愚放する。

<sup>4</sup> 趙義成(2015:180-183)参照。

<sup>5</sup> 野間秀樹・金珍娥(2004:253-257)参照。

<sup>6</sup> 辻野裕紀(2016c)参照。

<sup>7</sup> 辻野裕紀(2016a)参照。

<sup>8</sup> 辻野裕紀(2016b)参照。

<sup>9</sup> 辻野裕紀(2015)参照。

<sup>10</sup> 韓国語史、とりわけ音韻史については、辻野裕紀(forthcoming2)を参照されたい。さらに深く知りたい方には、福井玲(2013)が必読書。韓国語史の全体像を掴むには、李基文(1975)が最適。

を涵養することのほうが遥かに大切ではないのか<sup>11</sup>。TOPIK など、韓国語能力を評定する規矩はいくつかあるが、韓国語能力を査定することにはどのような意味があるのか。検定試験を励みにするのはよいが、それが目的化してしまうのは、学びの本態的なあるべき姿に背馳しているのではないのか。言語というものは、問題を解いたり、他人を値踏みしたり、何か得をするための手段として存在するわけではないのではないのか。心理学の〈自己決定理論〉の枠組みを借用すれば、〈内発的動機づけ〉こそが価値があるのではないのか。効率的な学習などというが、そうした「コスパ」重視の怠惰な精神性と学びの本質は最初から相容れないのではないのか。ニーズなどといった経済の語法で言語教育を語る営為自体が根本的な誤謬ではないのか——言語教育の潮流への臆怯にも近い結紮し難い反発心も私の執筆意欲を刺戟する。既存の教科書への不満も少なくない<sup>12</sup>。

本講義は、「韓国語学の最前線」を語るものであるが、韓国語学の研究は汗牛充棟であり、扱われる分野も広大無辺に拡がっている。代表的な先行研究をただ列挙するだけでも 90 分の授業では到底不可能であり、韓国語学全分野の最前衛を知悉しているわけではない私の力量をも遥かに超える。また、分野を局限し、特定領野の専論のみを断片的に述べても、学部1年生を対象としたフロンティア科目に相応しい講義にはなりにくいであろうし、それでも時間が足りない。そうした点に鑑みて、本講義では、私がこれまで行ってきた研究の一端を簡単に紹介することで、韓国語学の思路をささやかながら提示し、斯界へと分け入るための前奏曲としたい。

私がこれまでに扱ってきた韓国語学の諸問題は、大きく次の4領域に分類しうる：

- (1)音韻論・形態音韻論
- (2)文法論
- (3)言語教育論
- (4)その他

上記の如く韓国語学の核となる分野については、ある程度研究対象としてきたが、語彙論や談話論、語用論などについては扱ったことがない。本講義では、時間の関係上、(2)文法論と(4)その他は省略し、(1)音韻論・形態音韻論と(3)言語教育論に関する拙論の内容のごく一部を述べることにする。

#### 4. 音韻論・形態音韻論

##### 4.1. 大邱方言のアクセント(辻野裕紀 2008, 2010a, 2010c, 2014b)

大邱方言は、慶尚道方言の下位方言であり、弁別的なピッチアクセント(distinctive pitch accent)を持つ方言として知られている。韓国語がもともと弁別的なアクセントを有していたかは

<sup>11</sup> 言語教育における〈読むこと〉をめぐっては、辻野裕紀(2018)を参看されたい。

<sup>12</sup> 既存の韓国語教科書の問題点については、辻野裕紀(2019), 辻野裕紀(forthcoming1)を参照。

措くとして、少なくとも中世韓国語には見られた弁別的なピッチアクセントは、現在多くの方言で失われており、ピッチアクセントを持つ方言は、慶尚道方言や咸鏡道方言、全羅道方言の一部、江原道方言の一部に限られる。また、現在、標準語やソウル方言の影響で各地のアクセント体系が変化しつつあり、近い将来、朝鮮半島全体が無アクセント化する可能性もある。そういった意味で、ピッチアクセントを持つ韓国語の諸方言は、一種の〈危機言語〉(endangered language)であり、その綿密な調査と分析は、韓国語学における喫緊の課題である。

そうした中、私がフィールドワークを通して、大邱方言の名詞のアクセントを剖析し、闡明し得た主な事項は次の通りである：

- ・語形成論的な観点から、単純語/複合語を分離し、その結果、大邱方言の名詞のアクセント体系は、単純語という範囲では5型アクセント、複合語(名詞結合)まで含めると $n+2$ 個( $n$ は音節数)の対立がある多型アクセントである。なお、非高齢層話者においては、長母音がソウル方言等と同様に崩壊しており、事実上、単純語では4型アクセント、複合語では $n+1$ 個の対立を有する多型アクセントとなっている。

- ・計量的な観点から照射すると、単純名詞では、次末音節(penultimate syllable)にアクセントが置かれる〈-2系列〉の生起頻度が最も高い。つまり、〈-2系列〉が大邱方言の名詞のアクセントの default である。この〈-2系列〉傾斜は、音節数の増加に従ってより顕著になり、音節数 $n$ の値が大きくなればなるほど、次末音節にアクセントが置かれる〈固定アクセント体系〉に収束していく。

- ・〈-2系列〉傾斜は、言語類型論的にも刮目すべき結果である。何となれば、世界のアクセント言語の中で、次末音節にアクセントを置く言語は許多あり、アクセント規則として一般性が高いからである。ラテン語とその末裔たるイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語といったいわゆるロマンス諸語や、言語接触によってラテン語の影響を受けた英語、ドイツ語、オランダ語といったゲルマン語派の言語は勿論、アッサム語、アリュート語、ウイльта語、イラヌン語、アイマラ語、アラビア語(レバノン方言、ベドウィン方言)、ハワイ語、トンガ語、インガ語、マム語、マナム語、フィジー語、日本語東京方言(の特に外来語)なども、〈-2系列〉傾斜のアクセント規則を有する。

- ・アクセントと分節音の間にある程度の相関性が認められる。例えば、次末音節が弱母音の開音節であれば前次末音節にアクセントが置かれやすい。また、OOC, OOC(Oは開音節, Cは閉音節)のような音節構造の語であれば末音節にアクセントが置かれる傾向がある。これは弱母音にはアクセントが置かれにくい、開音節よりも閉音節のほうによりアクセントが置かれやすいという、通言語的なアクセントのありように吻合するものである。

#### 4.2. ソウル方言の〈n挿入〉(辻野裕紀 2012b, 2013, 2014a, 2014c, 2016c, 2017c)

現代韓国語において、閉音節に、母音(半母音を含む)で始まる音節が続くとき、先行する閉音節の終声(音節末子音)は、後続する音節の初声(音節頭子音)として実現する。つまり、

韓国語において、(C)VC + V(C)という音節連続が生じると、休止を入れない限り、(C)VC\$V(C)と発音されることはなく、必ず(C)V\$CV(C)と発音される(Cは子音、Vは母音、\$は音節境界)。これを〈終声の初声化〉(initialization of finals)と呼ぶ。

一方、このような音韻論的環境のうち、後続音節が/y/や/i/で始まる場合((C)VC+yV(C)、(C)VC+i(C))には、後続音節の初声の位置に/n/が挿入され、終声の初声化が阻止されることがある。これを〈n挿入〉と呼ぶ。

以下、〈終声の初声化〉と〈n挿入〉の具体例を挙げる：

#### 【終声の初声化】

일본[ilbon]《日本》+어[ɔ]《語》→일본어[ilbonɔ]《日本語》

못[mot]《釘》+이[i]《が》→못이[mofi]《釘が》

못[mot:]《...できない》+읍니다[omnida]《来ます》→못 읍니다[mo:domnida]《来られません》

안[a:n]《眼》+약[jak]《薬》→안약[a:njak]《目薬》

#### 【n挿入】

솜[so:m]《綿》+이불[ibul]《布団》→솜이불[so:mniɸul]《綿入りの布団》

국민[kuŋmin]《国民》+윤리[julli]《倫理》→국민윤리[kuŋminnjulli]《国民倫理》

막-[mak]《荒い》+일[i:l]《仕事》→막일[manil]《荒仕事》

맨-[men]《何も混ざっていない》+입[ip]《口》→맨입[menniɸ]《空腹》

한[han]《した》+일[i:l]《こと》→한 일[hannil]《したこと》

옷[ot]《服》+입다[ip'ta]《着る》→옷 입다[onniɸt'a]《服着る》

このように、現代韓国語において、閉音節に/y/ないし/i/で始まる音節が続くと、話者は〈n挿入〉と〈終声の初声化〉のうち、必ずどちらか一方を義務的に選択しなければならない。(C)VC+i(C)、(C)VC+yV(C)という音節連続が生じると、単一の氣息群(breath group)で発音する限り、単純語、派生語、複合語、句を問わず、〈n挿入〉か〈終声の初声化〉のいずれか1つが必ず生じるのである。したがって、「〈n挿入〉が起きるか起きないか」という問いは、「〈n挿入〉と〈終声の初声化〉のどちらを選択するか」という問いとほぼ同義である。

〈n挿入〉が生じるためには、如上の音韻論的条件を充足していることに加え、後行要素が自立形態素でなければならないという形態論的条件がある。つまり、〈n挿入〉は、純粋な音韻論的平面内では十全たる記述が不可能な〈形態音韻論的現象〉である。整理すると、〈n挿入〉が生じるためには、次の3つの条件を全て満たす必要があるということである：(1)先行要素が子音で終わる；(2)後行要素が/y/か/i/で始まる；(3)後行要素が自立形態素である。

〈n挿入〉をめぐる争点としてはいくつかあるが、私が明らかにした点のうち、時間の関係上、2点のみに限定して挙げることにすると、次の如くである：

・〈n 挿入〉が起きるためには、上記の(1), (2), (3)をすべて充足させる必要があるが、(3)を満たしていなくても〈n 挿入〉が起きる「反例」がある。具体的には、(A)後行要素が補助詞句の場合、(B)後行要素が漢字語接尾辞の場合、である。これら(A), (B)の場合には、後行要素が自立形態素ではないにもかかわらず、〈n 挿入〉が生じ得、どのように説明すべきかが問題となる。そこで、まず、言語形式を「自由形式」か「拘束形式」のいずれかに二者択一的にカテゴライズしてきた従前の研究の問題点を剔抉し、言語形式の自立度の階層性、連続性を指摘した。その上で、服部四郎博士の論考などを参照しつつ、形態論的条件の反例となる(A)と(B)を検討した結果、(A)補助詞句、(B)漢字語接尾辞はともに、拘束形式の中では、相対的に自立性が高いことが明らかになった。このことは、とりまなおさず、〈n 挿入〉の形態論的条件として、後行要素の自立性に対する着目が正しいことを意味している。つまり、この形態論的条件に対して、一部の先行研究によって提出された反論は穏当ではなく、〈n 挿入〉が生じるためには、後行要素は、狭義の完き自立形態素ではなくとも、自立的な要素であることが必要だと結論づけうる。

・逆に、〈n 挿入〉は、(1), (2), (3)をすべて満たしていても、起きない場合がある。これを〈選択的 n 挿入〉と称呼する。どういった語や句が〈n 挿入〉を起こしやすく、起こしにくいのか、その実現態を余蘊なく究明し、その総体に肉薄するために、固有語、漢字語、外来語、混種語、句のすべてを対象として、〈n 挿入〉が起きる可能性のある語句(全 1025 個)について網羅的に調査を行なった。世代による差異が存在する可能性を顧慮し、インフォーマントは若年層(20代)ソウル方言話者に条件統制した。

その結果、若年層ソウル方言話者の〈n 挿入〉の実現如何には、総じて後行要素の頭音が最も大きく関わっていること、また、他にも後行要素の長さ、先行要素の末音、なじみ度、語構造、後行要素の第 1 音節の音節構造、語の長さなどといった多種多様な要因が抗衡しつつ、重層的に関与していることが明らかになった。若年層ソウル方言話者のこうした〈n 挿入〉の実現様相は、いわゆる規範と懸隔しており、社会言語学的にも興味深いものである。

## 5. 言語教育論:〈言語道具観〉を超えて(辻野裕紀 2016d の一部を引用。一部改変)

3 章で開陳したように、現在の言語教育のありように関して私は違和を感じているが、その最たるものは、〈言語観〉の問題である。〈言語をいかなる存在と見做すか〉という、教育実践を撐える言語観は極めて重要である。具体的な教授法を云々する以前に、言語観をめぐる議論が十分に上下されるべきであり、そうした思考なき言語教育は不毛である。

「外国語」教授法の思潮史に通底する〈言語は道具である〉という考え方を〈言語道具観〉と称す。言語道具観は、言語教育界の思想のメインストリームと言ってよい。実際、ある人たちにとって言語は単なる道具でしかない。飛鷹のための道具、銜いのための道具、コミュニケーションのための道具——いかにも軽佻浮薄である。勿論、それはそれでよい。余人の容喙するところではない。言語に対してそういう限定的な接し方もあろう。言語が他者と交わるための媒介機能を本質的に有しているが故に、特に、言語がコミュニケーションの道具であるという見方は

一片の真実を衝いてはいる。しかし、大学における言語教育が言語に対してその程度の浅膚な見識しか持てない視野狭窄に陥っているとすれば、それは大問題である。そうした思想下において言語は、道具としての役目を畢えると、即座に弊履の如く棄てられる。

結論から言おう。〈言語道具観〉は、洋の東西を問わず、言語教育界に蔓延する、唾棄すべき宿痾である。言語教育に携わる者は、言語の過度なる〈手段化〉を慎み、瀰漫するこの厄介な桎梏から脱却せねばならない。それでは、巷間に猖獗する〈言語の矮小化〉という燎原の火に対して、我々はいかに抗弁しうるだろうか。言語道具観に対する反駁を試みてみよう。

### 5.1. 言語芸術と言語道具観

例えば、言語道具観の中に〈文学〉は成立するか——否である。同一の言語外現実を綴るのに片言隻語に拘り抜く小説家にとって言語は単なる道具ではあり得ない。一言一句に自らの存在を賭する詩人にとっても同断である。言語芸術において、言語はおよそ道具以上の存在であり、ポイエーシスは言語への倒錯したフェティシズムと表裏一体である。そこでは〈表現されるもの〉と〈表現するもの〉がいつも相互浸透的な関係となる。

日本語と韓国語のあわいで引き裂かれ続けた李良枝にとって言語は単なる道具だったのだろうか。「母国」の街で「母国語」を耳にすると「まるで催涙弾の匂いを嗅いだように苦くなる」由熙は、言語を「あくまでもコミュニケーションの道具」などと軽々しく言えただろうか。あるいは、温又柔にとって、日本語は、台湾語は、北京語は、一体いかなる存在なのだろう。あるいは、山之口獏にとって、琉球語とは、日本語とは、何だったのだろうか。デリダにとって、「たった一つの、私のものではない」フランス語とは？カリブ海のエドゥアール・グリッサンにとって、パトリック・シャモワゾーにとって、フランス語とは？李彌勒にとって、金恩國にとって、テレサ・ハッキョン・チャにとって、トリン・ミンハにとって…… 問いは尽きない。

母語ではない言語——〈他者の言語〉——を自らの意志で〈自己表現言語〉として引き受けた越境作家にとって、言語とは何だろう。〈他者の言語＝自己表現言語〉は表現のための一手段に過ぎないものだろうか。ではなぜ困難を冒してわざわざ他者の言語を自らの言語としたのだろうか。だいたい、言語道具観に支配された教育現場から、リービ英雄や多和田葉子、水林章、楊逸、李琴峰のような知性は生まれうるだろうか<sup>13</sup>。

なんびとにとっても、言語はアイデンティティー(自己同一性)の問題と深く結び付いている。この意味で、言語は人間の存在それ自体である。言語的基盤の崩壊は、アノミーを齎す。

ルーマニア出身のフランス語表現作家・シオランは、『告白と呪詛』の中で、《On n'habite pas un pays, on habite une langue.》(人はある国に住むのではなくある言語に住むのだ)と述べている。言語を住処(demeure)と見做す者にとって、言語が道具以上のものであることは自明であろう。

言語問題は、こうした思考の先では、人の「生き死に」に関わる、時に肺腑を抉るような、極

<sup>13</sup> 〈他者の言語〉と〈自己表現言語〉をめぐる問題については、辻野裕紀(2010b)を参照。



めてシビアにして実存的な問題として立ち現れうる。

## 5.2. 母語論と言語道具観

母語論<sup>14</sup>の観点からも、言語道具観を照らしてみよう。なぜ我々は日本語が話せるようになったのか。いかにして〈象徴界〉(le symbolique)が出現したのか。各自の意志で日本語を母語として選んだわけでは決してない。この点で、母語は〈選択不能な恣意性〉を帯びた存在である。日本語は我々がこの世に生を受ける遙か昔から存在していて、幼き日に両親をはじめ、親戚や近所の人、幼稚園の先生など、〈重要な他者〉(significant others)の日本語を聴きながら、いつしか日本語話者になったのである。周りの大人たちが幼き我々に日本語でたくさん語りかけてくれたから日本語話者になれたのである。それは我々が愛されてきた証左でもある。愛なしにことばを習得した人はいない。そういった意味で、ことばは圧倒的に人間的な営みで、いつも母性的な愛を想起させるものである。こうした、誰にとってもかけがえのない母語という存在を、どうして単なる道具などと割り切れるだろう。

そして、愛の中で羽包まれ身体化された言語のありようは、育ってきた環境、学んできた方法が皆異なるがゆえ、各人で大なり小なり異なる。同じ言語を話す者はこの世に誰ひとりとして存在しない。この確乎たる事実は、各人の存在の〈唯一無二性〉、〈代替不可能性〉を強く携えてくれるものでもある。そして、各人におけるこうした言語的異なりが、時として誤解や紛紜を招来しつつも、コミュニケーションを激しく賦活し、他者との関係を劈いていくのである。

また、言語は人の来し方を鮮明に映し出す。「言葉は身の文」(『春秋左氏伝』)とは言い得て妙である。言葉——特に母語——にはその人の知性や人間性が如実に現れる。「共通語」を話しているつもりでも、方言学に通暁した言語学者の手に掛かれば、本人は意識すらしていないような瑣末なアクセントや表現等から、その人がどこで言語形成期を過ごしたかが仄見える。地域のみならず、社会階層(couche sociale)も言語に投影され、場合によっては、言語と価値が直に結び付けられる。さらに、階層の違いに起因する〈言語コード〉の差異は、学力にまで影響を与えることが指摘されている。

こうした一連の思考は、言語道具観を断乎として拒斥する。人間の存在の根幹に関わる言語は、〈入れ替え不可能〉なものである。翻って、道具は一般に〈入れ替え可能〉なものである。もし言語が道具に過ぎないとすれば、言語は〈入れ替え可能〉なものでなければならない。このように、〈言語は道具である〉という命題は帰謬法的にも誤りである。

## 5.3. 〈目的〉としての言語:〈プラクシス〉から〈テオリア〉へ

これまでの議論で分明的に、言語は人間の存在そのものである。〈ホモ・ロケンス〉という語に象徴されるように、言語は人間を他の動物から区別する種差でもある。言語そのものを研究対象とする〈言語学〉は、ソシュールを鼻祖とし、特に 20 世紀の人文学(humanities)を牽

---

<sup>14</sup> 母語論をめぐるについては、辻野裕紀(2017b)を一読されたい。講義録だが、九州大学附属図書館のリポジトリで読むことができる。

引してきたと言ってよい。大学における言語教育は、安直なコミュニケーション志向を改め、言語それ自体をもっとよく見据え、考える方向——テオリア——へと舵を切っていかなければならない。

世間には言語能力をスキルと見做す向きもあるが、言語能力を単なるスキルと呼べるほど、言語は単純ではない。言語は文化に繫縛されているという意味でも複雑であるし<sup>15</sup>、言語内部のシステムも極めて複雑である。日々、言語学の新たなる論文が陸続と発表されていることからそのことは容易に賢察されよう。未解決の問題も多く、言語学専攻の語学教師でさえ、百パーセント分かった上で教壇に立っていると言うにはまだまだ程遠いのである。教室で突きつけられる、学生たちの素朴な疑問は多くの場合、本質を衝いた言語学的な問いである。そうした知の萌芽を最大限に尊重し、説明しうる問題は具体例に徴しつつ情理を尽くして説き、説明しえない問題は学生と共に考えたい。実は〈説明しえない〉ということは、〈説明しうる〉こと以上に、教育上、有効に作用する。〈分からない〉ということがさらなる知的好奇心の呼び水になるからである。そして、〈分からなさ〉を動因として、教師自身も、刻々と進展する言語学の成果を学び続けなければならない。また、言語そのものも漸次変化するし、何よりも学生の「世代的感性」が変わっていく。研究論文に学び、研究書に学び、教科書に学び、学生に学ぶ。教師自身の凝り固まった感性を熔融し、旧態依然たる授業を革めねばならない。「知的空気」が横溢する、清冽なる授業は、杳然たる知の〈欠落感〉に満ちた教師と学生の絶えざるやりとりの中から生まれるのである。

なお、誤解なきよう附言するが、目標言語を用いて、その言語の母語話者とコミュニケーションを図りたいという志は勿論貴い。言語学習の最も自然にして純粋な契機と言えよう。本稿はそれを聊かも否定するものではない。しかし、こうした、「意思疎通願望」は——目指す水準にもよるが——言語を正面から捉え、言語自体を禁欲的に学ぶ者にとっては——血を吐く努力が必要ではあるが——実はいとも簡単に叶えられるものである。アカデミズムの場である大学の言語教育の志はその程度に留まってほしくないというのが、本稿の主張である。

## 6. おわりに

以上、私がこれまで取り組んできた研究の一部を紹介することで、韓国語研究とはいかなるものであるか、その輪郭を簡単に素描した。

最後に、これから学究の道へ進まんとする諸氏に私が銘肝していただきたいと考えることを3点挙げておきたい。

1 つ目は、他者の研究＝先行研究を一先ずは受け入れてみるということである。勿論、先行研究を軽信してはいけな<sup>し</sup>、批判的精神やオリジナリティ、プライオリティは研究にとって不可欠である。しかし、批判的な読みと折伏的な振る舞いは異なる。先行研究を分析的に読解しつつも、それを最初から論破しようとするのではなく、とりあえず受容する構えで、眼光紙背

---

<sup>15</sup> 言語教育と文化の関係については、辻野裕紀(2017a)を参照。

に徹して読む。その過程で先賢から学び取れることはかなり多い。一己の創見を案出しようとするあまり、先行研究の粗探しのみに徹してしまうのは、愚かというものである。従前の研究を難詰するのみならず、先学に大いに学び、その良い点をさらに発展させることができないかというベクトルにも思考を傾け、<sup>こうが</sup>勘ってみることが必要ではないか。最も大事なことは、先行研究に拒抗することではなく、これまでに蓄積されてきた歴大なテキスト群、アーカイブに敬意を表しつつ、そこにささやかな付け足しをさせていただくという、どこまでも謙抑的な〈贈与の精神〉である。

2つ目は、〈分からなさ〉に耐える力を養うことである。先に、〈分からない〉ということがさらなる知的好奇心の呼び水になると書いたが、分かった気になってしまうというのが最も懼れるべきことで、何でも性急に結論しようとするのではなく、分からなさの渦中に泰然として身を置くことのできる、精神的な強靱さが研究には求められる。精神医学の術語を用いて、〈ネガティブ・ケイパビリティ〉(陰性能力)<sup>16</sup>が要請されると換言してもよいだろう。焦慮に駆られず、遲疑逡巡し、時間をかけて沈思黙考できるだけの知的膂力を錬成せねばならない。

3つ目は、関心領域を焦点化しすぎしないということである。自分の専攻はこれだと自縛してはいけない。私は学部時代はフランス語を専攻していて、言語学以外にも、哲学や思想、社会学などにも広く関心を有していた。文学にも興味があり、最近は実際に文学に関わる仕事もしている。端的に言って、私は韓国語研究の道を専一的に疾駆<sup>しっく</sup>してきたわけではない。しかし、そうした関心の〈ゆらぎ〉が自身を知的に富裕化し、分厚くしてきてくれたという実感がある。かかる経験から、狭隘なひとつの領野にのみ自閉するのは望ましいとは考えない。とりわけ、研究者志望の学生に慫慂<sup>しんよう</sup>したいのは、あまり早い段階から専門分野を決めないということである。辻野裕紀(2017d)でも述べたように、専攻という拘縮した枠に内閉せず、目先の評価など齒牙<sup>やくたい</sup>にもかけず、益体もないように見えることを幅広く泥臭く吸収し考える構えが肝要である。知的なものには何でも飛びつき、追尾する正の走性——これを〈走知性〉と呼ぼう——を涵養し、一望俯瞰的に学問の世界を眺めつつも、その時その時に興味があることにとりあえず没頭する。ある分野に没頭し、また別の分野に没頭する。そうした領域間の絶えざる跋渉<sup>ぼつしょう</sup>の反復により、自身の興味関心が鮮明化する。そして過去に没頭した分野は、新たに没頭する分野の研究や学びを強く支えてくれる。研究も学びもその本質は没頭に在る。ポジティブ心理学のマーティン・セリグマンが幸福の3要素のひとつとして〈没頭〉を挙げていることは周知の如くである。研究する者、学ぶ者こそが幸せである。

#### ●参考文献(本稿で言及した文献のみ)

- 李基文(1975)『韓国語の歴史』, 村山七郎監修, 藤本幸夫訳, 東京:大修館書店。  
金恩愛(2003)「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」, 『朝鮮学報』188, 天理:朝

<sup>16</sup> ネガティブ・ケイパビリティについては、帯木蓬生(2017)を参照。

鮮学会.

河野六郎(1994)『文字論』, 東京:三省堂.

趙義成(2015)『基本ハングル文法 初級から中級まで』, 東京:NHK 出版.

塚本勲(1997)「日本の朝鮮語観—体験をふまえて」, 『日本語と外国語の対照研究IV 日本語と朝鮮語 上巻 回顧と展望編』, 国立国語研究所, 東京:くろしお出版.

辻野裕紀(2008)「韓国語大邱方言における名詞のアクセント体系」, 『朝鮮学報』209, 天理:朝鮮学会.

辻野裕紀(2010a)「日本語東京方言と韓国語大邱方言の音調についてのアクセント論的考察—アクセント体系と出現頻度, 類型論—」(原文は韓国語), 『日本学報』84, ソウル:韓国日本学会.

辻野裕紀(2010b)「〈他者の言語〉を〈自己表現言語〉として引き受けるということ—〈跨境的な生〉の実践をめざして—」, 『日本語教育研究』19, ソウル:韓国日本語教育学会.

辻野裕紀(2010c)「韓国語大邱方言における名詞のアクセントと分節音の関係」, 『朝鮮語研究』4, 大阪:朝鮮語研究会.

辻野裕紀(2012a)「日本における日韓対照研究の展開—文法研究を中心に—」(原文は韓国語), 韓国日本語学会編『日本語学研究の最前線 2012』, ソウル:チェックサラン.

辻野裕紀(2012b)「現代朝鮮語の〈n 挿入〉をめぐる—形態論的条件と語種論的条件を中心に—」, 『外国語教育研究』15, 東京:外国語教育学会.

辻野裕紀(2013)「言語形式の自立性と音韻現象—現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として—」, 『朝鮮学報』229, 天理:朝鮮学会.

辻野裕紀(2014a)「現代朝鮮語の〈n 挿入〉に関する—考察—発生論と機能論—」, 『韓国朝鮮文化研究』13, 東京:東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.

辻野裕紀(2014b)「アクセント体系の〈計量的非対称性〉をめぐる—中期朝鮮語と朝鮮語大邱方言を対象に—」, 『言語科学』49, 福岡:九州大学大学院言語文化研究院言語研究会.

辻野裕紀(2014c)「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の実現実態について(1)—若年層ソウル方言話者を対象に—」, 『朝鮮学報』232, 天理:朝鮮学会.

辻野裕紀(2015)「現代朝鮮語における言語規範と認識度—いわゆる〈saisios〉を対象に—」, 『韓国朝鮮文化研究』14, 東京:東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.

辻野裕紀(2016a)「現代朝鮮語の漢字語〈流音後濃音化〉浅析」, 『韓国朝鮮文化研究』15, 東京:東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.

辻野裕紀(2016b)「現代朝鮮語における漢字語形態素の語彙的濃音化—漢字語接尾辞‘-cek (的)’を対象に—」, 『言語科学』51, 福岡:九州大学大学院言語文化研究院言語研究会.

辻野裕紀(2016c)「現代朝鮮語における〈n 挿入〉の実現実態について(2)—若年層ソウル方言話者を対象に—」, 『朝鮮学報』240, 天理:朝鮮学会.

- 辻野裕紀(2016d)「言語教育に伏流する原理論的問題—功利性を超えて—」,『言語文化論究』37, 福岡:九州大学大学院言語文化研究院.
- 辻野裕紀(2017a)「試論:言語教育にとって文化とは何か」,『言語科学』52, 福岡:九州大学大学院言語文化研究院言語研究会.
- 辻野裕紀(2017b)「〈境界〉に佇立すること,〈境界〉画定を峻拒すること—複数の言語を生きるために—」,九州大学基幹教育フロンティア科目「ことばの科学」講義録.
- 辻野裕紀(2017c)「現代朝鮮語の形態音韻論的現象に見られる共時的変異について」,『音声研究』21-2, 東京:日本音声学会.
- 辻野裕紀(2017d)「学びの愉悦を共にしたい」,『CROSSOVER』42, 福岡:九州大学大学院地球社会統合科学府.
- 辻野裕紀(2018)「〈読むこと〉をめぐって—内向き志向の言語教育へ向けて—」,『言語科学』53, 福岡:九州大学大学院言語文化研究院言語研究会.
- 辻野裕紀(2019)「韓国語教科書=韓国語教師の誤謬を剔抉する—「文字と発音」を中心に—」,九州大学大学院言語文化研究院中韓合同FD発表論文.
- 辻野裕紀(forthcoming1)「韓国語教科書をめぐる諸問題—言語学的視座から—」,野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第5巻』,東京:くろしお出版.
- 辻野裕紀(forthcoming2)「韓国語音韻史の諸相—中世語を中心に—」,野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第5巻』,東京:くろしお出版.
- 野間秀樹(2010)『ハングルの誕生 音から文字を創る』,東京:平凡社.
- 野間秀樹・金珍娥(2004)『Viva! 中級韓国語』,東京:朝日出版社.
- 帯木蓬生(2017)『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』,東京:朝日新聞出版.
- 福井玲(2013)『韓国語音韻史の探究』,東京:三省堂.
- 油谷幸利(2005)『日韓対照言語学入門』,東京:白帝社.